



倉天心全集  
5

平凡社

岡倉天心全集 (全八卷)

第五卷 定價 五四〇〇円

一九七九年二月二五日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地  
郵便番号一〇〇二  
電話〇三(二六五)〇四五一  
振替東京八一九六三九

印刷 東洋印刷株式会社  
製本 株式会社石津製本所

## 凡 例

一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能な限り蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。

二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。

三、英文の著書、著述、未発表草稿は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。

四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査ノートなどは、できるだけ原型を損わぬよう翻刻した。

五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。

1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。

2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。

3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 せ↓れ)、合字(例 尻↓トモ)などは通行の文字に改めた。

- 5 底本が自筆原稿の場合、文意の通じにくい字句、固有名詞の誤記などは「」内に註記した。(例 渴ヲ医スル〔ニ〕足ル、姜委<sup>〔維〕</sup>)
- 6 句読点、改行、字下りなどの扱いは、通行の方式にしたがって整理したが、底本が自筆原稿、書簡などで句読点のない場合は、おおむね句点にあたる箇所および読み誤りやすい箇所を一字あけにした。
- 7 みせ消ちは原則として翻刻せず、内容理解に必要と思われる場合のみへゝ内に翻刻した。
- 8 破損、その他判読不能の箇所は、□□、□□、□□□□のように示した。
- 9 必要に応じてルビを付し、現代仮名遣いをもって表記した。底本が総ルビの場合は、特殊な読み方などを残し、他は省いた。
- 10 天心作の漢詩は第七巻で一括して註釈を付すため、本文中では白文のままとした。

本巻(第五巻)には日記、旅行日誌のすべてを収録した。年代順では「欧州視察日誌」(明治二十年)、「雪泥痕」(二十三年)、「支那旅行日誌」(二十六年)、「支那行雜綴」(二十七年)、「支那旅行日誌」(三十九〜四十年)、「欧州旅行日誌」(四十一年)、「六物記」(四十四年)、「九州・支那旅行日誌」(四十五年)となるが、本全集では欧文の多い「欧州視察日誌」と「欧州旅行日誌」を後半部にまとめ、他は年代順に配列した。

欧文は、主な部分を註として訳出し、「支那旅行日誌(明治二十六年)」など他の校訂註(\*で示す)と一括して、本文の最後に付した。

日誌本文中に出てくる、天心と関係の深い人物や記事については、解題で触れた。また解題には、関連資料や写真を挿入した。

なお、本巻では校訂上、つぎの方針を追加した。

○天心の誤使用（講議〔義〕、鴻陞〔陞〕店、武侯〔侯〕祠など）は初出にのみ「ママ」を付し、庵・菴、鋪・舗などは、天心の使用にしたいが、敢えて統一しなかった。

○欧文の場合、スペリングの誤りは正したが、文法上の誤り、意味不明の箇所、スペリングの不明な人名などは原文のままを翻刻し、*ss* はいっさい付けなかった。ただし、日付や箇条書きナンバーの重複などには *ss* を付した。

○欧文中の和文は、原則として縦組にしたが、読みやすくするため横組にした箇所もある。

○図版は本文関連部分のできるだけ近くに挿入し、かつ必要に応じて〔上図〕〔下図〕のように示した。

○欄外の記入は「」で、関連する箇所へ挿入した。

# 目 次

## 凡例

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 雪泥痕               | 3   |
| 支那旅行日誌（明治二十六年）    | 13  |
| 支那行雜綴             | 115 |
| 写真目錄              | 117 |
| 経歴書               | 120 |
| 支那旅行報告稿           | 127 |
| 支那旅行講演メモ          | 136 |
| 支那美術ニ就テ           | 146 |
| 支那旅行―幻燈説明         | 153 |
| 国家経済会に於ける講演メモ     | 166 |
| 支那旅行日誌（明治三十九～四十年） | 175 |
| 六物記               | 217 |
| 九州・支那旅行日誌（明治四十五年） | 223 |



|                |     |
|----------------|-----|
| 歐洲視察日誌（明治二十年）  | 279 |
| 歐洲旅行日誌（明治四十一年） | 387 |
| 訳註             | 449 |
| 高階秀爾           |     |
| 解説             | 475 |
| 橋川文三           |     |
| 解題             | 490 |

岡倉天心全集 第五卷



雪  
泥  
痕



明治二十三年十一月廿五日 起筆

課 ○結城氏ニ褒賞面料ヲ送ル ○褒賞画改按浄写ヲ安藤氏ニ托ス ○褒賞画ニ関スル照会ヲ博物館ニ廻ス

○専修科普通科美学美術史課程ヲ定ム ○推古時代取調へ ○写真スライド取調へ ○履歴書青山氏ニ廻ス

○岡田任一氏ニ廿六日午下廿七日午前会ノ事申送ル ○坂田氏等ニ断リ状出ス事 ○荻原氏ニ譴責状送ル

廿六日 ○普通科講義<sup>マ</sup> ○博物館褒賞画 ○スライド ○博物館計画 ○推古時代取調 ○午下文部省會議ヲ了<sup>おわ</sup>  
リ博物館

廿七日 ○岡田来ル ○文部省ニ至リ中川氏ニ面ス ○推古時<sup>代</sup>取調 ○スライド及馬後藤氏ニ托ス ○シカ

ゴ出品今泉氏ニ托ス ○シガゴ博覧会出品計画(児嶋氏按) ○本邦美術史骨子起草 ○夜森田氏ニ行く

廿八日 ○専修科講義 ○博物館

廿九日 ○国会開院式 ○休日 ○衆寶来ル

卅日 ○文部大臣官邸ニ会ス ○夜あへは氏と堀越ニ行く

十二月一日 ○川田徳二郎氏来ル ○王石谷ノ画ヲ返ス

十二月二日 ○博物館 今泉氏ニ整理談ヲなす 夜篁村来ル

三日 ○講義 ○木屋来ル ○あへは 宮崎 川島 国府来ル 書物ヲ借ル

四日 ○川嶋織物下絵考按 五日午下ヲ約ス ○正午蒙古襲来ヲ見ル 土屋鳳洲翁来ル 共ニ博物ヲ見ル 夜篁

翁と伊香保へ 去テ翁の居ヲ訪ふ

五日 午前専修科講義 午下川嶋来ル 靈運寺応挙山水ヲ見ル 元歩障タリシヲ以て墨痕疏々 然レトモ猶當時  
の妙ヲ見ルニ足ル 喬松兩三株飛泉ヲ掛ケて屹立し奔湍飛流筆意大ニ見ルヘシ 玉章先生ニ着色ヲ托ス 荻原

夜来ル

六日 図書館読書 鳳洲先生来ルヲ以て家ニ帰ル 一夜大酔 絃ほしさまニ本来の道ヲ談ス 快談三更ニ徹ス 竟つひニ翁

と臥ス 偶然来リ会スル者宮崎三昧 川崎千虎 中世梅花等アリ 皆酔ふ

七日 日曜 森思軒書ヲ飛ハして朝来飲ヲ勸む 鳳翁在ルヲ以て森ヲ招く 森来リ痛飲快論止ムル所ヲ知らず

翁千葉ニ行くヲ以て正午辞し去ル 余も思軒氏と共に精養軒ニ行き松野 大谷木諸氏と談スル所あり 既ニし

て思軒去ル 余モ用ヲつくり家ニ帰ル 夜亦森の来ルニ遭ふ 則チ浅草ニ散策して帰リて家ニ飲む 夜二更篋

翁社友ヲ伴ひ来ル 此夜大風雨

八日 木屋策ならず 此日ボートインの飛球ヲ見ル 夜ル森氏ヲ訪ふ 止マリ飲む 歯痛む 思軒氏福地氏ニ扶

けられ家ニ帰ル 片山氏ニ会し奈良筆ヲ談ス

九日 梅若氏と荻原氏の事ヲ談ス 九鬼君ニ面し高橋氏ノ事ニ関し承諾ヲ得 夜小川氏来ル 此日国華社より25

来ル

十日 普通科講議 陸氏来ル 相川の事ヲ語ル 歯痛止マス早く家ニ帰ル 留守中土屋氏来リ別ヲ告ぐ 晩暗樓

文集三卷ヲ留メ贈リ明日去ルト云ふ 夜篋村 森鷗外 森田氏等来リ飲む 左眼ニ腫物あり痛し少ナカラス

歯痛殆ント癒ゆ

十一日 眼痛ニより緑川国手ヲ聘し一日休ミて加療し薬ヲ点ス 痛ミ甚し 九鬼氏より書アリ 高橋氏の事ヲ曰

ヒ辻氏の諾ヲ告ぐ 野呂氏当分差支ヲ告ケ来ル 宮本氏他日高氏ニ来会ヲ促シ来ル 夜ニ入りて痛ミ漸ク休む

則チ筆ヲ採て内心解剖表ヲ作り将来警戒と希望ヲ書し架空之言以て自から慰む 大愚可笑矣

十二日 課 講議 日本 文部省 宮本〈森島〉書ヲ〈竹内〉片山 藤田 土屋ニ発ス 夜木熊石頭ヲ経て高橋

- ニ至ル 春の舎竹の舎あり 竹と共に帰る 手翰ヲ裁ス
- 十三日 午前工場ヲ見る 梅若来ル 夜陸氏来 明朝川崎翁と日本初摺を約ス
- 十四日 日曜 春のや来り荻原ノ債ヲ半担ス ○川崎 森田 あへは 宮崎 福地ノ来会スルアリ 具楽部設立  
ヲ計ル 午下動物園ニ行く
- 十五日 午前諸巻幅ヲ檢シ宮川長春ヲ陸ニ送ル
- 十六日 住吉策ならず 夜宮崎氏来ル
- 十七日 講議 夜高橋夫人来ル 鈴木氏来ル
- 十八日 内匠寮會議 高橋氏ニ行ク 午下九鬼氏ニ面ス
- 十九日 講議 書ヲ林ニ発ス
- 二十日 林ならず 午下福井学生懇親会ニ行く 後倶楽部ニ行く 書ヲ木熊ニ発ス(破戒)
- 二十一日 午前松本 川田 小川来(煤掃)テ去ル 森田氏ニ飲ミ宮崎氏及年英と三河嶋ニ遊ヒ元明神屋敷田中  
軍次の方ニ到ル 帰て仏国記ヲ読ム 小川氏曲物(其明画)ヲ貽ル
- 二十二日 午前疋田来ル 久保田氏安井ノ事ヲ依頼ス 馬ヲ見ル 今朝加納夏雄唐櫃形ノ目貫ヲ貽ル 高橋氏書  
付来ル
- 二十三日 文部省ニ行く 後九鬼氏ニ面ス 夜あへば来ル 演藝会延ふ
- 二十四日 山高氏二十八日招宴承諾 安藤氏 講議
- 年内 ○モチ—— ○画正書 ○褒賞画 ○村山 ○文部 ○ガワルド
- 二十五日 文部省ニ至リ勅語親署ノ分拝受 奈良出張之事等辻浜両氏ニ話し上申ヲ出し宮内省ニ行く



